

菅原道真研究

——『菅家後集』全注釈（九）——

焼山廣志

一

前回①に引き続いて、本稿では以下の『菅家後集』の作品の全注釈を試みたい。今回は調査・考察を済ませた『菅家後集』

「501題竹床子」「503秋夜」の二首を取り挙げてみる。

注釈を進める上での「凡例」は前稿②のそれに倣う。

二

本文

平仄

501 題竹床子 通事李彦環所送*

- ・彦環贈與竹細床 ●○○●●●○○◎
- ・甚好施來在草堂 ●●○○●●◎
- ・應是商人留別去 ○●○○○○●●

- ・自今遷客著相將 ●○○●●●◎
- ・空心舊爲遙踰海 ○●●●○○●●
- ・落淚新如昔種湘 ○●○○●●◎
- ・不費一錢得唐物 ●●●○○●●
- ・寄身偏愛惜風霜 ●○○●●○○◎

*脚韻は、「下平声陽韻」。韻字は「床・堂・將・湘・霜」

校異

*題字下傍注「通事李彦環所送」：○事李○環所送。七言（内

一）「通事李彦環所送七言」（大島）（松平）（太二）刊本

全本。「通事李彦環所贈」（太二）

▼頭注「環作環。無七言字」（大島）

*環：環（大島）（松平）（太二）刊本 全本。

▼頭注「環作環」（大島）

*贈：▼頭注「贈作送」（大島）

*繩…承(○)(内二)(松平)(尊四)

*著…看(●)(大島)(太二)(太二) **刊本** 全本。

▼頭注「看著作」(大島)

*舊…旧(内一)

*植…殖(●)(静嘉)(尊一)(尊三)

榎(●)(松平) 右傍注「植敷」(松平)

▼頭注「植作殖」(大島)

*錢…金(○)(内二)(大島)(松平)(尊四)(太二)(太二)

刊本 全本。

▼頭注「金作錢」(大島)

*惜…恨(●)(内二)(大島)(松平)(尊四)(太二)(太二)

刊本 全本。

訓読

- ・彦環 贈り與ふ 竹の繩床
- ・甚だ好し 施し來りて草堂に在るに
- ・應に是れ 商人留別し去なるべし
- ・今より遷客著きて相將ふ

・空心舊りたるは遙かに海を踰るが為なり。

・落涙新にして 昔湘に植ゑしがごとし。

・一錢を費さずして唐物を得たり。

・身を寄せて偏に愛す 風霜を惜しむことを。

通釈

・彦環が竹の繩床を贈ってくれた。

・草堂にこれをしつらえるところら隠居し自樂する者には、はなはだ適う。(と思われる)

・この繩床は、唐からやって來た商人が日本を去る時に置土産としていつたものだろう。

・これからは、この私がこの繩床を愛用することしよう。

・竹の内部が空洞になっているのは(その昔)はるばると海を越えて來たからに違いない。

・この竹に私の涙が落ちかかると(その昔、舜紀が夫の死を耳にし、竹に涙を注いだところ班紋をなしたという)湘水のほとりに植えられていた竹のように思えてくる。

・私は一錢も使うことなく、貴重な舶來品を手に入れたことになる。

・(これからは)この繩床に身を寄せて、長年いとしみ愛用しに行きたいものだ。

語釈

○床子：人が座つたり寝そべるものを「床」という。「床」は「装」である。自らを装載する（Ⅱのせる）ものである。『漢辞海』

○通事：『漢辞海』には「①国家間の交際、②取次役・面会などの取り次ぎをする役。③通訳をする人」と説明がある。ここでは「③通訳をする人」の意である。『大漢和辞典』では「④通弁・通訳官」と説明し、『癸辛雜志』の「訳者今北方謂之通事、南蕃海舶謂之唐舶、西方交徭謂之蒲又皆訳者名也」を引く。『漢語大詞典』では「④旧指翻譯人員」と説明し、『新五代史』「晋出帝紀」の「甲辰、契丹使通事來」の用例を載せる。○繩床：繩を張つて作つた腰かけ。今の安樂椅子に似た坐具。胡牀、『晉書』「佛圖澄傳」に「澄至故泉源上、坐繩牀、燒安息香、呪願數百言」の用例が、「孟浩然・陪李侍御訪聽人禪居詩」に「石室無人到、繩牀見虎眠」の用例が見える。『漢語大詞典』では「亦作『繩牀』。一種可以折疊的輕便坐具。以板為之。并用繩穿織而成。又称『胡床』『交床』」と説明し『學林』「繩牀」の「繩牀者、以細實穿爲坐物、即俗謂之交椅之屬是也」の用例を挙げる。『白氏文集』「270愛詠詩」に「坐倚繩牀閑息念、前生應是一詩僧」の句が、又「282秋池」に「洗浪清風透水霜、水邊閒坐一繩牀」の句が見える。↓補説 参照。

『田氏家集』「140七言、九日侍宴、同賦鐘聲應霜、應制。一首」に「履著詩家朝葛履、眠驚仙曉繩牀」の句が見える。

○草堂：①草ぶきの家②自分の家を謙遜するという言葉、粗末な家。『漢辞海』『大漢和辞典』では更に「古、隱居して自ら樂しむ者は、多く草堂を営む。杜甫の浣花草堂、白居易の盧山草堂の類。」と説明する。『漢語大詞典』には「茅草蓋の堂屋。旧時文人常以『草堂』名其所居・以標風操之高雅」と説明があり、「杜甫・狂夫詩」の「萬里橋西一草堂、百花潭水即滄浪」の用例を載せる。『白氏文集』には多数の用例が見出せる。『田氏家集』には「1賦得詠三」として「未能參○○、荒逕草堂生」の句が見える。『菅家文章』「310山寺鐘」に「草堂深鎖翠煙松、抜苦音聲五夜鐘」の例が見える。

○別去：別れ去る。「劉方・平代宛轉歌」に「黃鶴瑤琴將別去、芙蓉羽帳惜空垂」の例が見える。

○自今：今から後。これから。以後。爾今。今後。『詩經』「魯頌・有駟」に「自今以始、歲其有」の例が見える。

○著：着物を身につけるように「びったりとつく」の意。異本にある「看」の意は、「手をかざして見る。見守る。うかがいみる」である。ここでは「著」の字を採る。

○相將：『漢語大詞典』には「相偕（Ⅱとともにする、いっしょにいる）。相共」と説明がある。

○遷客：罪を得て遠方へ流された人。左遷流謫された人。「江淹・恨賦」に「遷客海上、流戍隴陰」の用例が、「李白・與史郎中欽、聽黃鶴樓吹笛詩」に「一爲遷客去長沙、西望長安不見家」の用例が見える。『菅家後集』「480聞旅雁」に「我爲遷客汝

來賓、共是蕭々旅漂身」の句が、又「500雨夜」に「農夫喜有餘、遷客甚煩懣」の句が、「509燈滅二絶——」に「遷客悲愁陰夜倍、冥々理欲訴冥々」の句が見える。

○空心：①うつろになつた木のしん。「瘦信・枯樹賦」に「火入空心、膏流斷節」の例が見える。『漢語大詞典』には②謂物体内部は空的」と説明する。『昔家文章』「329奉謝源納言移種家竹」に「空心爲是天姿勁、瘦幹寧非地勢寒」の用例が見える。○踰……こえる。わたる。『漢語大詞典』には「同、逾」と説明し「踰山越海」の項で「亦作、踰山越海、越過山海、謂長途跋涉」と説く。用例として『南齋書』「高帝紀上」の「人跡罕至者、莫下踰山越海、北面稱蕃」を挙げる。

○落涙：涙を流す。泣いて流れ落ちた涙。墮涙。隕涙。零涙。流涕。「魏文帝・見挽船士兄弟辭別詩」に「妻子牽衣袂、落涙霑懷抱」の例が見える。『田氏家集』「37於右丞相省中直盧讀史記竟、詠史得高祖、應教」に「數行潸淚故鄉、任官重厚須安嗣」の句が見える。

○昔植湘：補説 参照

○唐物：中国及び諸外国から舶来した品物。舶来の雜貨。唐貨。○偏愛：特別に、すこぶるいつくしむこと。大切にすること。『漢語大詞典』には「在幾個人或幾件事物中特別喜愛或單喜愛其中的一個或一件」と説明し、「杜荀鶴・登山寺」の「就中偏愛石、獨上最高層」の句を引く。『辞源』では「獨愛也、今謂祖護（＝庇護）一方曰偏愛」と説明をする。『白氏文集』「3362奉

和思黯相公李蘇州所寄、太湖石奇狀絕倫、因題二十韻見示。兼呈夢得」に「疏傳心偏愛、園公眠屢廻」の句が見える。『文華秀麗集』「51昔清公・奉和春閨怨一首」に「獨瀨耶嬾偏愛重、何圖見者以爲神」の用例がある。『昔家文章』「77早春、侍宴仁壽殿同賦認春、應製」に「今朝莫道春深淺、偏愛吹噓長養多」の句が、又「305對殘菊詠所懷、寄物忠兩才子」に「偏愛夢中未失盡、不和籬下菊開殘」の句が、「340上巳日、對雨翫花、應製」に「且憐有清香猶襲、偏愛無塵色更加」の句が見出せる。

○惜：いとおしむ。大事にする。大切にすること。異本にある「慣」とすると「慣れる・慣れたしむ」の意となる。ここでは「惜」の意を採る。

○風霜：年時の変遷をいう。としつき。年月。「沈佺期・遊少林寺詩」に「雁塔風霜古、龍池歲月深」の用例がある。『漢語大詞典』では「比喻變遷的歲月」と説明がある。『白氏文集』「酬元九對新栽竹有懷見寄」に「共保秋竹心、風霜侵不得」の句が見える。『凌雲集』「76言心」に「風霜日夜積、榮耀待何時」の用例の句が、又『文華秀麗集』には「62王昭君一首」に「沙漠蟬鬢、風霜殘玉顏」の句が、又「120代神泉古松傷衰歌一首」に「昔從凡木殖上林、過却風霜年幾深」の句が見える。紀長谷雄の漢詩「27貧女吟」に「日往月來家計盡、飢寒空送幾風霜」の句が見える。『昔家文章』「153殘菊」にも「若使風霜怒、當留早老顏」の句が、又「203寒早十首——四」に「每被風霜苦、思親夜夢頻」の用例が見出せる。

補説

○「繩床」の持つイメージ考

「繩床」の語意については前述の語釈の項で言及したが、この語に込められているイメージを道真がどのように把握していたのか、その一つの手掛りとなるものが『白氏文集』の以下に挙げる作品に込められているように思う。

2370 愛詠詩

詩を詠ずを愛す

- ・ 辭章諷詠成千首
- ・ 心行歸依向一乘
- ・ 坐倚繩牀閒自念
- ・ 前生應是一詩僧

辭章諷詠千首を成し

心行歸依一乘に向かふ

坐して繩牀に倚りて閒に自ら念ふ

前生應に是れ一詩僧なるべし

大意は「忽ち詩興がわき詩を詠む事、早、千首が出来上がった。心も行いも今の私は仏道に帰依している。繩床に腰を落つけてゆつたりと心静かに、自身の事に思いを馳せると恐らく、私自身の前生はきつと詩僧であつただろうと思われてくる。」となろうか。もう一首を引くと

2852 秋池

秋池

洗浪清風透水霜 浪を洗ふ清風、水に透る霜

・ 水邊閑坐一繩牀

水邊閑坐す 一繩牀

・ 眼塵心垢見皆盡

眼塵心垢皆盡くることを見る

・ 不是秋池是道場

是れ秋池ならず是れ道場ならむ

大意は「池の周辺の清風は波を洗い、霜は池水に透けている。池辺に繩床を持ち出し閑坐して池をながめていると（いつの間にか）眼の塵も心の垢も皆すっかり盡きて消滅したようだ。とすれば、ここは秋池というよりはむしろ心身の修道場と呼んだ方がよさそうである。」となろう。

○六句目「落淚新如昔植湘」の典故について

堯の女、舜の妃の娥皇・女英である湘君が舜の崩御を聞き、舜を慕って湘水のほとりに来、身を投じて死に、湘水の神となったという伝説があり、その時湘水のほとりの竹に湘妃が涙を注ぐと斑紋をなしたという故事に基づく句作りとなっている。

【湘君】『楚辭』「九歌・湘君・補注」に「劉向列女傳、舜陟方死於蒼梧、二妃死於江湖之間、俗謂之湘君」、禮記、舜葬於蒼梧之野、蓋二妃未之從也、注云離騷所歌湘夫人、舜妃也」の記事が見える。又「駱賓王・酬思玄上人林泉詩」に「芳杜湘君曲、幽蘭楚客詞」の用例が、又「李白・陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭湖詩」に「日落長沙秋色遠、

不知何處弔「湘君」の用例が見える。『大漢和辞典』

【湘水】川の名。源は広西省興安県の陽海山。澗水と源を同じくいて澗湘といい、県の東で澗水と分離し、湖南省零陵県の西に至って澗水を含して澗湘といい、衡陽に至って蒸水を含して蒸湘という。以上を三湘と称す。『述異記』に「湘水、去岸三十里許、有相思宮望帝臺、昔舜南巡而葬於蒼梧之野、堯之二女娥皇・女英、追之不及、相與慟哭、淚下沾竹、竹文上爲之斑斑然」の記事が見える。『大漢和辞典』

【湘竹】斑竹の異称。湘妃が涙を洒いで斑紋をなしたという。

涙竹。湘妃竹。『大漢和辞典』「柳宗元・巽上人以竹間自采新茶見贈詩」に「芳叢翳湘竹、零露凝清華」の句が、『白氏文集』「江上送客詩」に「杜鵑聲似哭、湘竹斑如血」の句が見える。「岑參・秋夕聽羅山人彈三峽流泉詩」に「楚客腸欲斷、湘妃淚斑斑の句が、「瘦信・哀江南賦」に「城崩杞婦之哭、竹染湘妃之淚」の句が見え、文人の好題目となっていたことがうかがえる。

『藝文類聚』「卷八十九・木部・竹」の項にも「博物志曰、洞庭之山帝之二女啼、以涕揮竹、竹盡斑、今下雋有斑皮竹」の記事が見える。

三

本文

平仄

503* 秋夜

床頭展轉夜深更 ○○○●●○○○
 背壁微燈夢不成 ●●○○○○●●○
 早雁寒葢聞一種 ●●○○○○●●○
 唯無童子讀書聲 ○○○●●○○○

童子小男幼字 近曾天亡

*脚韻は下平声庚韻。韻字は「更」「成」「聲」

校異

○題字下注「七言」：(内二)(大島)(加越)(松平)(尊四)

○展：「展」ミセケチ「展」(太二)

○微：○(欠)(尊三)「微」ミセケチ「微」(尊四)

○雁：「雁」(静嘉)(加越)(彰考)(太二)(太二)刊本 全本。

○聲：声(内一)

○分注「童子小男幼字近曾天亡」：なし(静嘉)(尊二)(尊三)

▼頭注「無分注十字」：(大島)

訓読

- ・床頭 展轉して夜深更
- ・壁に背く微燈 夢成らず
- ・早雁 寒蛩 聞くに一種
- ・唯童子の書を讀む聲無し
- 童子は少男が幼字、近ころ曾て夭亡す

通釈

- ・(秋の夜長) 寢床で眠れるまま寝返りをうっているうちに
- (いつの間にか) 夜更けを迎えてしまった。
- ・壁を背にした、ほの暗い灯の下で(私の愁いは一層深まり) 眠りにつくことが出来ない。
- ・秋の到来を告げる早雁の声を聞いた時も、秋の深まりを知らせる寒蛩の声を耳にした時も、その鳴き声は例年のそれと少しも変わるものはなかった。
- ・(なのに) 今年の秋だけは幼かった我が子の書物を讀む声が聞かれないのである(ことが、たまたまなくつらい。)

童子とは年かさの行かない幼い子の呼び名である。近ころ亡くなってしまった。

語釈

○床頭：牀頭。ねだいのほと。ねどこあたり。「高適・醉

後贈「張九旭詩」に「牀頭一壺酒、再能幾回眠」の例が見える。「漢語大詞典」には「亦作牀頭」①坐榻或鋪的旁边②床的一端」との説明があり、「岑参・宿岐州北郭嚴給事別業詩」の「疏鐘入卧内、片月到牀頭」の用例を挙げる。「白氏文集」①196贈吳舟「南山入舍下、酒甕在牀頭」の例が「1015贈内子」に「寒衣補燈下、少女戲牀頭」の例が、又「0212效陶潛體詩十六首并序」(六)に「牀頭殘酒榼、欲盡味彌淳」の用例が見える。「田氏家集」には「207菊花」に「床頭促燥霑嫌雨、屋裏閑排拍見人」の句が見える。紀長谷雄の作品にも「55秋榮照帙賦」に「皓皓不消、豈積雪片於床頭」の用例が見える。

○展轉：ねがえりする。臥しても心が安んぜず、やたらに寝返りをする。『廣雅』「釋訓」に「展轉、反側也」の説明がある。「漢語大詞典」には「⑤翻身貌。多形容憂思不寐、臥不安席」と説明し『楚辭』「劉向・九嘆・惜賢」に「憂心展轉、愁佛鬱兮(王逸注)展轉、不寤貌」の用例が、又「李咸用・山中夜坐故里友生詩」に「展轉簷前睡不成、一牀山月竹風清」の用例があるのを挙げる。「白氏文集」①050山鷓鴣「夢郷遷客展轉臥 抱兒寡婦彷徨立」の句が見える。

○深更：夜中・夜ふけ・深夜。「漢語大詞典」には「深夜、①指半夜以后」と説明し『宋書』「顏延之傳」に「恍若迷途失偶、厭黑如深夜微燭」の用例があるのを引用する。「白氏文集」には「0233春眠」の「春被薄亦暖、朝窓深更閑」の用例が見える。

『田氏家集』は類語「夜深」として次の句が見える。「62八月

十五夜、惜月」に「月好偏憐是夜深、三更到曉可分陰」とある。又紀長谷雄の作品「32夜陰歸房」という詩に「空夜窓閑螢度後、深更軒白月月初」の句がある。『菅家文草』には、「76海上月夜」に「行遲淺草潮痕沒、坐久深更月影斜」の句が、又「341就花枝、應製」に「眼歡令樹饒溫澤、心恨深更向曉天」の句が見出せる。○背壁：壁に背を向けること↓「向壁」

『白氏文集』には、「360夏夏曉興・贈夢得」に「背壁燈殘夜宿焰、閉箱衣帶隔年香」の句が見えるし、「031上陽白髮人」には「耿耿殘燈背壁影、蕭蕭暗雨打牕聲」の句が見える。この詩には他の句にも措辞の視点での投影が窺える。↓補説 参照。

『田氏家集』にも「87夢高侍郎」に「淚隨冬霰交橫落、秋與寒燈向背燃」という類似表現を見出すことが出来る。この作品については措辞のみならず内容にも多くの類似点を指摘することが出来る。↓補説

○微燈：かすかな燈火。『韓愈・秋懷詩』に「微燈照空牀、夜半偏入耳」の句が見える。『漢語大詞典』には「暗淡的灯光」と説明する。

○早雁：早鴻。秋早く来る雁。「李白・陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭詩」に「洞庭湖西秋月輝、瀟湘江北早鴻飛」の句が見える。『菅家文草』「265聞早雁寄文進士」に「無勝早雁叫傷情、沙漠涼風送遠行」の句が見える。

○寒蛩：晩秋に鳴くこおろぎ。寒蟲。「蛩」は「こおろぎ、蛩、促織」の事で『爾雅』「釋蟲」に「蟋蟀、蜚」(疏)蟋蟀、一名蜚

今促織」の説明がある。『詩經』「唐風・蟋蟀」に「蟋蟀在堂(傳)蟋蟀、蜚也」の記事が見える。『漢語大詞典』には「寒蟲」の項に「寒天的昆虫、多指蟋蟀」との説明がある。「韋應物・擬古詩」に「寒蛩悲洞房、好鳥無遺音」の句が、又「李郢・宿虛白堂詩」に「秋月斜明虛白堂、寒蛩唧唧樹蒼蒼」の句が見える。類語の「寒蟲」としては「常建・听琴秋夜贈寇尊師詩」に「寒蟲臨砌急、清吹衰燈頻」の用例がある。『白氏文集』には「238秋晚」に「覺寒蛩近壁、知暝鶴歸籠」の句が見える。『菅家文草』「449九日後朝、侍宴朱雀院、同賦秋思入寒松、應太上皇製」に「攀蓋仰瞻驚旅雁、拂根傾聽感寒蛩」の句が見える。

○一種：同じ。同じ様。『漢語大詞典』には「一様・同様」と説明し、「元稹・酬東天得微之詩知通州事因成四首之四」の「定覺身將囚一種、未知生死何如」の例を挙げる。『菅家文草』「30戊子之歲、八月十五日夜、陪月臺、各分一字」に「詩人遇境感何勝、秋氣風情一種擬」の用例が、又「80喜田少府罷官歸京」に「山郵水驛思粉々、一種風光兩處分」の用例が見える。

○童子：未だ冠しない未成人の称。童兒。童孺。童豎。『漢語大詞典』では「兒童・未成年的男子」と説明し、『儀礼』「喪服」の「童子唯當室總(鄭玄注)童子未冠之稱」の記事を引く。又、韓愈の『師說』中の「彼童子之師、授之書而習其句讀者、非吾所謂傳其道解其惑者也」の用例を挙げる。

○讀書：『漢語大詞典』では「閱讀書籍。誦說書籍」と説明す

る。ここでは、声に出して書を読むことを指す。韓愈の「感二鳥賦」序に「讀書著文、自七歳至今、凡二十二年」の例がある。○小男：小さい男の子。大男の対。「李商隱・詠懷寄秘閣舊僚、二十六韻詩」に「小男方嗜栗、幼女漫憂葵」の句が見える。○幼字：幼時のあざな。おさない名。幼名。

補説

○二句目「背壁微燈夢不成」の表現について

措辞的には以下に引く『白氏文集』の「上陽人 慙^に怨^を」からの投影が濃厚のように思える。

この作品は自注に「天寶五載、楊貴妃が寵を専らにしてから後は、宮人の進幸を得る者はなく、美色ある宮人は皆特別な宮殿に置かれた。上陽宮は其の一である」とある諷諭詩の一つである。若い時美貌を見こまれて宮中に入った女性が、天子の寵愛を独占している楊貴妃に睨^{にら}まれ、上陽宮に閉じこめられたまま年老いてしまったその悲哀を詠んだものである。その中の一文、秋夜を回想して

・宿空房。秋夜長 空房に宿す 秋夜長し(十七句目)
・夜長無寐天不明 夜長く寐ぬる無くして天明けず(十八句目)
・耿耿殘燈背壁影 耿耿たる殘燈壁に背ける影(十九句目)
・蕭蕭暗雨打牕聲 蕭蕭たる暗雨牕を打つ聲(二〇句目)

(傍線筆者)

「上陽宮に閉じ込められて暮らす一人住まいには、とりわけ秋の夜が長く感じられる。夜長に目が冴えて眠ることが出来ず、夜はなかなか明けようとしな^い。壁によって立つ薄暗い灯火のもとで寂しく窓をうつ夜雨の音を聞き尽したものである」と詠む。この上陽宮女の嘆きの一文を、道真是我子を亡くした悲嘆の情を詠む「503秋夜」の一・二句「床頭展転して、夜深更」、「壁に背く微燈、夢成らず」の表現に生かしているように思える。白詩からの内容としてより措辞的な投影の窺える句である。一方、道真の義父にあたる嶋田忠臣の詩文集『田氏家集』の中に「87夢高侍郎」という作品がある。

村田正博氏の説明によると

「高侍郎」は本集56の詩題「兵部高侍郎」および21・35・59・191詩題の「高進士」「高侍中」「高大夫」「高少史」と同人で高階令範か。本集59「傷高大夫」はその死を傷むもので、貞観十五(八七三)年頃の作らしい。この87は、本集の配列をほぼ年代順と信ずれば、それより八年後の元慶五(八八二)年のもので、第五句から、その冬の作と察せられる」とある。③以下の全句を引く。

87夢高侍郎 高侍郎を夢る
・金蘭失契十餘年 金蘭 契りを失ふ 十餘年
・容鬢宛然一夜眠 容鬢 宛然たり 一夜の眠り
・似訴別來多歲月 訴ふるに似る 別來 歲月多きことを

・如言詠得幾風煙 言ふが如し 幾風煙を詠み得しことを

・淚隨冬霰交橫落 涙は冬霰に随ひて交横して落つ

・愁與寒燈向背燃 愁へは寒燈と向背して燃ゆ

・筆海馮君爲此目 筆海君に馮きて此の目と爲る

・長悲片月早歸泉 長悲す片月の早く泉に帰せしことを

本文・訓ともに、小島憲之監修『田氏家集注』本に拠る。傍線筆者。

作者である嶋田忠臣が交際の深かった高侍郎と死別して長い年月が経つにも関わらず、死別の悲しみは消え去るのではなく、一層心の奥深くに凝り固り、或る時ふとした折、それが頭をもたげる。冬の或日、作者が夢みた体験を一気に筆にしたためた作品のように思える。そこには長い時空がそうと認識されず昨日のような出来事に思え、高侍郎との交友体験が生き生きと蘇り、それだけに死別悲しみを改たにする。その心情を、とりわけ五・六句で「目覚めては、涙が冬の霰とともににはらはらとこぼれ落ち、せつない思いが、寒々とした灯火に向かつても背を向けても燃え立つ。」と詠う。傍線を付した六句の「愁」「寒灯」「向背」「燃」の詩語の使われ方が絶妙である。作者の高侍郎を思う気持ち（「愁」）が、「冬の夜のさむざむとした中」ともるかすかな灯（「寒灯」）と呼応しあい、灯火に向かいあつても背を向けてもその愁いは「燃えたぎる」のである。つまり「燃」に「灯火」と「愁」の二つの意を込めている表現と思われる。この嶋田忠臣の表現を、道真の「503秋夜」の二句目の表

現「壁に向いている、ほの暗い灯の下で（私の愁いは一層深まり）眠りにつくことが出来ない」に重ねると、一層、道真の我が子を亡くした悲しみが、「背壁」「微燈」の詩語の配置によって浮きぼりにされてくるのではないか。嶋田忠臣が道真の漢詩文修学時の師であり、終身忠臣の詩風に多大の影響を受けて来た道真にとって、この嶋田忠臣の詩内容が脳裏にあり、措辞に留まらず詩想まで深く理解されていたであろう事は想像に難くない。

【注】

(1) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（八）

（有明工業高等専門学校紀要）四十号

(2) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（二）

（国語国文学研究）第三十六号

熊本大学文学部国語国文学会

(3) 『田氏家集注 卷之中』小島憲之監修 五十九頁

(4) 『田氏家集注 卷之中』小島憲之監修 六十二頁

【追記】

この稿を草するにあたり、木下文理氏より多大の御助力をいただいた。とりわけ語釈・白詩中の詩語の検索等にお力添えをいただいた事に深謝申し上げたい。

二〇〇三年 十一月三日執筆了

（やきやま ひろし／大学院大学院七回修了・有明高専）